

はしがき

■編集の趣旨

本書は、「集中2週間完成」シリーズの一冊として、古典文法を中心に基本的な古文の読解力を養うことを目的とした「初級編」を踏まえ、さらなるステップアップを目指す高校二年生を対象にした問題集です。本格的な受験勉強に取り組む前に短時間で基礎力を確認したい諸君、古文の苦手な三年生の諸君にも有益です。

■本書の特長

- ① 各学習日とも見開き二ページに収め、学習の区切りがつきやすいように配慮しました。
- ② 問題本文(古文)は、テーマ別に有名作品・章段を中心に収録しました。
- ③ 問題本文の下段には、本文読解の助けとなるように「語注」を載せました。また、「ポイント」として、当日の問題を解く際に役立つ二種類のコメントを載せました。[Ⓢ]の後にはあらずじを、[Ⓢ]の後には解釈に関わる文法事項を記してあります。
- ④ 設問は、文法・語彙・内容把握等の各種問題をバランスよく配置し、客観・記述の両形式を取り混ぜ、古文の基礎力の確認・定着と発展的な力を伸ばすことができるようにしました。各学

編者

目次

第1日	枕草子	【自然】	雪が深く降り積もった夜、人々はしみじみと語り明かす	◆形容詞の音便	4
第2日	方丈記	【自然】	大自然の力の前に、人はもろくも倒れ、屈するしかない	◆対句法／ナ変型活用語	6
第3日	紫式部日記	【誕生と死】	孫の誕生に権勢家道長も満面の笑み、しかし紫式部は悩む	◆格助詞「が」／反実仮定の助動詞	8
第4日	徒然草	【誕生と死】	長生きは決して幸福とは限らない	◆順接の仮定条件と確定条件	10
第5日	土佐日記	【情愛】	亡き我が子を思う、いっそう世間の人情の冷たさを感じる	◆呼応の副詞／完了の助動詞の強意の用法	12
第6日	源氏物語	【情愛】	上に立つ人にとって必要なのは血筋ではなく学問である	◆助動詞「き」「ず」「む」の活用／「なむ」の識別	14
第7日	伊勢物語	【情愛】	男と女の愛は常にドラマチックな結末を迎える	◆「なり」の識別	16
第8日	更級日記	【宮仕え】	父親は、いつになっても我が娘の将来を案じる	◆助動詞「る」「らる」の意味・用法	18
第9日	枕草子	【宮仕え】	高貴な人々の日常生活に対する好奇心はいつの世の女性も同じ	◆「けれ」の識別	20
第10日	大鏡	【歴史】	傲慢とも思えるほど自信たっぷり、若き日の藤原道長	◆敬意の対象のルール	22
第11日	平家物語	【歴史】	激しい戦いの中に見る、主従の関係を越えた美しい人間愛	◆「に」の識別	24
第12日	発心集	【信仰】	出家の本懐を遂げてもなおお気にかかめるは生まれてくる我が子のこと	◆完了の助動詞	26
第13日	風姿花伝	【芸術】	最高の演技は、観衆にそれと気づかせない演技	◆助詞「が」の識別	28
第14日	奥の細道	【紀行】	旅路の前途に不安をかかえたまま、芭蕉は江戸を発つ	◆詠嘆を表す間投助詞「や」	30
+α1	蜻蛉日記		夫の訪れが間遠になり、我が身のはかなさを痛切に感じる	◆敬語の種類と主な単語	32
+α2	源氏物語		光源氏は妻を殺した女をもいとおしむ好色者	◆係り結びの法則の例外	34
+α3	世間胸算用		借金の慣れっこなどこの世にいて欲しくないもの		36
+α4	日本文学史		覚えておきたい古典文学の流れ		38

習日の「ポイント」で取り上げた文法項目に対応する設問には[Ⓢ]を付してあります。また、直接解答が書き込める解答欄も設けました。

⑤ 古文の苦手な諸君に配慮して設問の「ヒント」をできるだけ載せました。

⑥ 巻末には「+α」として、古文の演習問題と文学史の問題を四回分収録しました。本書の仕上げに利用してください。

⑦ 自己診断テストとして使用する場合のことを考え、制限時間と配点を示しました。

⑧ 「別冊解答書」は自学自習の際に十分理解できるよう、「解答」のほかに、「本文の展開」、設問の「解説」、「語句・文法」「出典」についての説明、「口語訳」を収録し、丁寧に詳しいものになりました。

本書が、諸君の古文読解力のよりいっそうの充実に役立つことを祈ります。

月 日 曜日

雪のいと高く降りつみたる夕暮より、端ちかう同じ心なる人ふたりみたりばかり、火桶ひきき中にすゑて物語などするほどに、¹暗うなりぬれど、こなたには火もともさぬに、おほかた雪の光いと白う見えたるに、²火箸ひさしして灰などかきすすみて、(1)³もをかしきも言ひあはするこそをかし。宵も過ぎぬらむとおもふほどに、⁴沓くつの音近う聞こゆれば、(2)と見出したるに、ときどきかやうのをり、⁵覚えなく見ゆる人なりけり。「けふの雪をいかにと思ひきこえながら、なんでふことにさはり、その所にくらしつる」などいふ。「⁶けふ来むひとを」などやうのすぢをぞいふらむかし。屋よりありつる事どもをうちはじめて、よろづの事をいひわらひ、⁷円座えんざさし出したれど、かたつかたの足は下ながらあるに、鐘の音のきこゆまになりぬれど内にも外にもいふ事どもは、⁸あかざおぼゆる。あけぐれのほどに帰るとて、「⁹雪何の山にみてり」とうち誦ずじたるはいとをかしきものなり。女のかぎりしては、¹⁰さもえゐあかさざらましを、ただなるよりはいとをかしう、すきたるありさまなどをいひ合はせたり。

【語注】

端ちかう同じ心なる人―部屋の縁に近い所で気のあった人が。
火桶―木製の丸火鉢。木をくりぬいて作ってある。
「けふ来むひとを」―山里は雪降りつみて道もなしけふ来むひとをあはれとはみむ(拾遺集)
円座―「えんざ」とも言う。わらなどを渦巻状に円く平たく編んだ敷物。
「雪何の山にみてり」―「¹¹暁あけニ梁はり王りやうノ苑えんニ入レバ雪群山ニ満テリ。…」(和漢朗詠集)

【ポイント】

雪の日、清少納言たち女房が火鉢を囲んで様々な話をしていると、うへ男がやって来た。男は無沙汰をわびながら、古歌を踏まえて趣深いことを語り、明け方帰っていった。女たちは男を交えたひとときに感動する。

形容詞のイ音便は連体形、ウ音便は連用形、撥音便は連体形からできる。

問1 傍線1「暗う」について、次の問に答えなさい。(3点×2)

- ① これを何音便というか。
- ② 音便になる前の形を正しく活用させてひらがなで書きなさい。

①
②

問2 傍線2「おほかた雪の光いと白う見えたるに」の口語訳として

- ア 予想よりも雪の光がととも白く見えているので
- イ 辺りといった雪の光がととも白く見えている中で
- ウ たいていの人たちは雪の光をととも白く見えていて
- エ 非常に多く積もった雪がととも白く見えるので

問3 空所1・2に入る語をそれぞれ次から選び、正しく活用させて書きなさい。(4点×2)

- 恋し あはれなり 早し あやし うらめし

1	2
---	---

問4 傍線3「をかし」・6「きこゆ」を正しく活用させて書きなさい。(4点×2)

3	6
---	---

問5 傍線4「かやうのをり」とはどのような時か。十字以上十五字以内で説明しなさい。(6点)

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問6 傍線5「来」の読み方をひらがなで書きなさい。(3点)

問7 傍線7「あかざおぼゆる」の口語訳として適当なものを次から

- 一つ選び、記号で答えなさい。(5点)
- ア 夜が明けたことにも気づかずにいる。
- イ とりとめもないことに思われる。
- ウ 飽き足らず不満に思われる。
- エ いつまでも興が尽きない思いがする。

問8 傍線8「えゐあかさざらまし」の品詞分解として適当なものを次から

- 一つ選び、記号で答えなさい。(5点)
- ア 副詞+動詞+助動詞+助動詞
- イ 動詞+動詞+助動詞+助動詞
- ウ 助詞+動詞+助動詞+助動詞
- エ 名詞+動詞+助動詞+助動詞

問9 傍線9「ただなるよりはいとをかしう」とあるが、「ただなる」時の説明として適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雪がたくさん積もらない時。
- イ 昼日中の人の多い時。
- ウ 面白い話題がない時。
- エ 女だけである時。

5点

【ヒント】

問3 空所1は連体形、2は終止形となる。2は宵過ぎに来たことから考える。問4 傍線3は係り結びの法則に注目。6の「きこゆ」はヤ行下二段活用の動詞である。問7「あく(飽く)」には、「満足する」意と「うんざりする」意とがある。ここは、時を忘れて話に夢中になっているのである。